

---

# HURRY UP!

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H U R R Y   U P !

### 【Nコード】

N 3 9 0 9 L

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

毎朝あの娘が気になってつついつい焦る日々。名前も知らない彼女だけれどそれでもいいと思っていたら。光GENJIの初期のアルバムからヒントを得た曲です。

## 第一章

H U R R Y  
U P !

夢には思えなかった。

彼女が目の前にいて僕に微笑んでくれている。

そして僕のことを見てくれていて。言ってきた。

「好きよ」

「えっ!？」

僕は思わず声をあげてしまった。

「今何て」

「貴方がことが好きよ」

また言ってきた。

「だから」

「だから？」

「付き合って」

こう僕に言ってきた。確かにそう聞いた。

「私と。よかったら」

「あの、それ本当？」

「嘘じゃないわ。その証拠に」

微笑んで目を閉じてだった。その小さくて綺麗な唇が近付いてきて。僕はそのことに夢みたいに思っているのだった。ここであった。

目覚ましの五月蠅い音が聞こえてきてだった。起きることになった。やっぱり夢だった。

「ちえっ、何だってんだよ」

僕はジャージのまま起き上がった。起きながら言うのだった。

「夢か、やっぱりな」

そのことにかっかりしながらベッドから出てそうして部屋を出てそれから下に降りてだ。リビングに入るともうテーブルの上に朝食の飯があった。

白い御飯に納豆にめざし、それと若布の味噌汁だった。見ただけでかなり美味しそうだ。

それを見ながらだ。お母さんがもうテーブルに座っていてそこから僕に対して言ってきた。

「おはよう」

「うん、おはよう」

「早く食べなさい」

朝に相応しい言葉だった。

「いいわね」

「わかってるよ」

僕もこう言葉を返した。言葉を返しながら自分の席に座って手を合わせる。それからパックの中の納豆をかき混ぜてそれから御飯にかけて食べる。めざしも一緒だ。

それをすぐに食べて歯を磨いて顔を洗って。服を着てだった。

「じゃあ行つて来るね」

「ええ。それにしてもよ」

「それにしても？」

「最近行くの早いわね」

お母さんの言葉だ。

「どうしたのよ」

「どうしたのって？」

「部活朝ないでしょ」

「うん、ないよ」

それははつきりと言った。僕は写真部だ。朝練があるような部活でもない。

自分が一番わかっていることだからだ。だから答えるのだった。

「それはね」

「じゃあどうして早いなのよ」

「ちよつとね」

「ちよつと？」

「ああ、何でもないよ」

ここから先は言わなかった。お母さんにも内緒だ。それでだ。玄関に向かいながら言った。

「行つて来るよ」

「ええ、行つてらっしゃい」

後ろからお父さんがリビングでいただきます、という言葉が聞こえてきた。僕はそれを聞きながら玄関を出てだった。家の駐車場にある自転車に乗つてだ。すぐに家を出た。

家を出て全速力で走る。信号に気をつけながら。

風景を見ている余裕はなかった。急がなくてもいいのについてい急いでだ。駅に向かう。

駅までは自転車で十分位だ。はつきり言つてすぐだ。それでも異様に長く感じる。とにかく早く駅まで辿り着かないと、と思つて仕方がない。

駅が見えてきた。脚がさらに速くなる。そうしてだ。

駐輪場に入つて自転車を止めて鍵を抜いて。その鍵を財布の中に入れてそれから駅に駆け込む。定期を通してそれからホームに向かう。

「よし、今日も間に合つたな」

時間を見たら電車が来る五分前だ。実は間に合つたところじゃない。

それでも僕にとっては間に合つたと言つていい状況だった。心の問題だ。

列車の二両目が来る場所に立つてだ。扉は三番目だ。

そこに来ないと一日がはじまらない。他の人から見たらどうでもいいことでもだ。

そこに立つて電車を待つ。電車が来るのを待つ。

やっと来た。待ちかねた。電車がホームに入るのをじつと見ている。

それが来てだった。停まるのを心待ちにして。停まってから扉が

左右に開かれるまでがとても長かった。開くとすぐに中に入る。心が勇んでいるのが自分でもわかる。

そして中にいる、目の前の席に座っている彼女をちらりと見る。背が高くてはつきりとした大きな目で髪は豊かでそれを茶色煮してシヨートにしている。顔付きは背が高いのに可愛い感じで鼻が高い。制服は隣の高校のものだ。その娘をだ。

彼女を知らないふりをして見る。たったそれだけ。それだけだけれど僕は彼女を見て心の中で微笑んだ。そしてだった。

それから学校に向かう。彼女のことは隣の学校ってことしかわからない。他のことは全然だ。名前さえもわからない。言葉を交わすあてもない。

## 第二章

けれど僕にとっては彼女と会えることだけが楽しみだった。それを見てだ。

僕は学校に向かう。学校での一日は何もない平凡なものだけれど満足していた。彼女を見る、それだけでもう充分過ぎるものだった。その僕にだ。周りも言ってきた。

「御前最近明るいな」

「何かあったのか？」

「あつ、何でもないよ」

僕はこう周りの言葉に返すだけだ。

「別にね」

「そうか？何か最近な」

「雰囲気が違うんだよな」

「そうだよな」

皆そんな僕を見て首を傾げさせながら言うのだった。

「何かな」

「違うんだよな」

「前とな」

「そうかな」

僕はとぼけてこう返すことにしている。実際にそうしている。

そんな日常だった。本当に周りから見たら些細なことだけれど僕にとってはとても大事なことだった。彼女の姿を見る、そのことだけだ。

そんなある日のことだった。帰りの電車に乗る。帰りは何もない。だからゆつくりと帰る。

ところがだった。その電車に乗ると目の前にだ。彼女がいた。

そしてだ。にこりと笑って僕に言ってきたのだ。

「はじめまして」

「えっ!？」

「前川麻里子です」

自分から名乗ってきた。はじめてその名前を聞いた。

「高校はもう御存知ですよね」

「う、うん」

戸惑いながら彼女に答えた。

「それは」

「御名前何ていうんですか？」

「弥生大輝」

問われるまま名乗った。気が完全に動転している。その中での返答だった。

「そうだけれど」

「そうですか。弥生君ですか」

「う、うん」

「二年生ですか？」

今度は学園を聞いてきた。

「私二年ですけれど」

「同じなんだ」

「ついつい言ってしまった。」

「それじゃあ」

「そうですね。あとですね」

「あと？」

「毎朝見てますよね」

単刀直入だった。それを言われて本当に心臓が飛び出しそうになる。自分でも胸からそれが突き破ったんじゃないかって思う位驚いた。

「私のこと」

「いや、それは」

「いいですよ」

ここでまたにこりと笑ってみせた彼女だった。



「そのことは」

「いって」

「あのですね」

完全に彼女のペースだった。そうして。

「それでですけど」

「それで？」

「これから夕方と一緒にありませんか？」

こう言ってきた。

「どうですか？一緒に」

「一緒につて」

「これからはちらりとじゃなくてずっと見ていいですから」

「あの、つまり」

ここでやっと彼女が言いたいことがわかった。そうしてだった。

彼女はさらに言ってくる。僕に言わせることすらしない。

「学校もわかりましたし。名前も。ですから」

そしてだった。言った言葉は。

「楽しく過ごしましょう。ずっと二人で」

これで決まりだった。僕は何と彼女の方から告白されてそれと一緒にになった。向こうも気付いていてそれで言われてだった。それからは朝だけでなく夕方も急ぐことになった。急がないではいられない困ったけれど嬉しい高校生活になった。

H U R R Y   U P !

完

2010・5・12

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3909/>

---

H U R R Y   U P !

2010年10月8日15時03分発行